

## 男女共同参画社会をめざした小学校家庭科におけるキャリア教育の授業実践

### Learning of Career Education for Gender-equal Society in Home Economics Education in Elementary School

鳥井 葉子\*, 吉田 友美\*\*

\*〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748 鳴門教育大学 生活健康系(家庭)教育講座

\*\*〒569-1112 高槻市別所本町35-5 奥坂小学校

Yoko TORII\*, Tomomi YOSHIDA\*\*

\* Department of Health and Living Sciences Education (Home Economics) Naruto University of Education  
748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-city, Tokushima 772-8502, Japan

\*\* Okusaka Elementary School  
35-5 Beshohonmachi, Takatsuki-city, Osaka, Japan

**抄録:** 男女共同参画の実現をめざして、小学校家庭科におけるキャリア教育として、児童にジェンダーにとらわれずに個性や能力を発揮できる将来の職業について考えさせる授業を試みた。授業前に抱いていた職業および家事労働に関わるジェンダー意識について、多くの児童において授業後に改善がみられた。しかし、男女共同参画の実現に向けて、今後も継続的な指導および家庭・地域への働きかけが必要であることが明らかになった。

**キーワード:** 小学校家庭科授業, キャリア教育, 男女共同参画社会, 職業労働と家事労働

**Abstract:** This report analyzed the effect of learning of career education for gender-equal society in home economics education in elementary school. The learning items were awareness of gender bias on work and housework and consideration of career results were as follows. Gender consciousness of students on work and housework was improved. The problem to be solved is to continue learning and to appeal to home and community for gender-equal society.

**Keywords:** Learning in Home Economics Education in Elementary School, Career Education, Gender-equal Society, Work and Housework

#### I. はじめに

現在、子どもの職業観・勤労観が形成できていないと問題が深刻化しており、文部科学省は「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書—児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために—」を出し、「キャリア教育総合計画の推進—初等中等教育からフリーターまでそれぞれに応じた適切な支援の展開—」<sup>注1)</sup>を図ろうとしている。この報告書では、平成11年12月の中央教育審議会答申にある「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」から「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」としている。

小学校におけるキャリア教育を三村は「進路の模索・選択にかかる基盤形成の時期」ととらえ、次のねらいを設定している<sup>注2)</sup>。

- ・自己及び他者への積極的関心の形成・発展
- ・身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上
- ・夢や希望、憧れる自己イメージの獲得
- ・勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成

一方、家庭科におけるキャリア教育について、河崎は「家庭生活と職業生活は非常に密時に接にかかわっており、いずれも人間生活を支える労働から成り立っている。家庭生活における知識やスキル等は、様々な職業生活の基盤となるものであり、家庭生活の延長線上にあるといえる。」とし、「家庭科におけるキャリア教育の意義は、生活キャリアと職業キャリアを統合し、生活キャリアと職業キャリアの双方に個人的・社会的意義を見出し、両者を関連づけて発展させることにある。」<sup>注3)</sup>と述べている。

本研究では、これらの先行研究をふまえ、現行の学習指導要領の改訂の基盤である中央教育課程審議会答申に示めされている家庭科改善の基本方針のなかの「男女共同参画社会の推進」<sup>(注4)</sup>を担う教科としての特色を踏まえ、ジェンダーにとらわれない職業選択に焦点をあて、男女共同参画社会をめざした小学校家庭科におけるキャリア教育の授業を構想し、実践した結果を検討するものである。すなわち、男女共同参画社会の実現を視野に入れ、児童がジェンダーにとらわれずに個性や能力を発揮できる将来の職業を考えることができるような小学校家庭科のキャリア教育の授業を試み、その学習効果の検討が本研究の目的である。

## II. 方法

1. 授業実践対象クラス（徳島市内の小学校5年36名）の児童を対象とした家事労働・職業労働に関するジェンダー意識および希望する職業に関する事前調査（2004年12月6日）
2. 男女共同参画社会をめざした小学校家庭科におけるキャリア教育の授業実践（2004年12月16日）と分析
3. 授業実践クラス児童を対象とした家事労働・職業労働に関するジェンダー意識および将来の家事労働・職業労働に関する事後調査（2004年1月12日）ならびに事前調査結果との比較

表1 学習指導案

第5学年 家庭科学習指導案			
日時：平成16年12月16日 木曜日 5校時 授業場(5年1組教室)			
授業者 吉田友美			
単元・題材 その仕事はだれがする？			
1 本時の目標 これまで「方の性が行うべきだとされていた仕事や職業について考え、性別に関係なく家事分担や将来の職業を考えようとする意識を持つことができる。			
2 展開			
時間	児童の活動	教師の支援	評価
5分	1 身の回りの人々の仕事の中で「女性にしかできない仕事」「男性にしかできない仕事」があるのかという点に注目する。 ○ 仕事について考えよう。	1 事前アンケートの結果を示し、性別に目を向けさせ、仕事について考えようとする意識をもてるようにする。	○ 仕事に目を向けることができる。 (発表・態度)
15分	2 夫婦の会話を演じ、登場人物の気持ちを考え、性別にとらわれた仕事があることに気付く。 ○ 家事を女性がやっている場合の裏にある背景を考える。	2 一般的に女性の仕事だとされている家庭の仕事の問題点に気付かすくすするために、登場人物になったつもりで考えるよう注意する。 ○ 生活に密着する仕事として、外で働くこと以外に家庭で働くことも仕事であることに気付かせる。 ○ 女性が家事を行うことが当たり前だと考える児童には、主夫の存在を知らせ、意識を変化させる。	○ 家事は女の仕事だとされていることの問題点に気付く。 (ワークシート・発表・活動)
15分	3 親子の会話のロールプレイングを行い、性別によって職業が制限されることに気付く。 ○ 職業を選択する場合に、家事の分担も影響していることに気付く。	3 シナリオを親子の会話にすることにより、自分の立場と関連しやすくする。 ○ 男性の保育士、女性の医師の例を出し性別によって職業が決められる訳ではないと気付かせる。	○ 性別に関係なく職業を選択することができることに気付く。 (ワークシート・活動・発表)
10分	4 さまざまな職業で、一方の性が行うべきだとされていた仕事について知り、性別にとらわれず職業を考えようとする。	4 本時の活動を振り返り、仕事と生活するための家事は密接な関係にあることに気付くことができるようにする。	○ 自分のやりたい仕事を性別にとらわれず考えようとする。 (ワークシート)

## III. 結果と考察

### 1. 授業実践

#### (1) 授業構想

学習指導案を表1に、授業のワークシートを表2に示す。授業構想の際に留意した点は次の通りである。家事労働と職業労働を児童に身近に感じさせるために、クラスの調査結果を提示するとともにロールプレイングを実践させた。また、「日本の成人男女の家事分担の希望(1993)」「世界の夫婦の家事と仕事の分担(2001)」を示し、他国との比較から日本の男女共同参画社会の実現の遅れについて把握することができるようにした。さらに、男女共同参画社会への関心を高めるために女医と主夫の例を授業資料に取り入れた。

#### (2) 授業の経過

授業のはじめに示したクラスの児童の調査結果を表3に、授業中の板書を表4に示す。授業後に提出させた児童の記述を中心に授業経過を述べる。

#### 1) 導入（児童の活動1）

はじめに授業のめあてを示してワークシートに記入させた。活動に興味を持たせるように思いつく職業名を挙げさせた。次に、世界には職業の種類がいくつあるのかを質問した。100種類から100万種類と幅広い数を児童が口々に発言して活発な反応があったため時間がかかり、予定していた児童の事前調査結果を導入部で示すことができなかった。

表2 授業のワークシート

12/16		その仕事はだれがする？	
		( )年( )組 名前( )	
今日のめあて			
1. 下の会話は、ある夫婦のやりとりです。2人になったつもりで読みましょう。 また( )に下線部のときの、それぞれの気持ちを考えて書きましょう。 【この夫婦は男性も女性も働いていて、いつも夕食は女性が作っています。】 男性 おなかすいたな、そろそろ夕食の時間だね。 女性 そうね、そういふいつも私が作っているわね。たまには… 男性 え？きみが作ってくれないの？ 女性 今日は仕事でつかれているのよ。 男性 それは僕も同じだよ。それに「男は外で働き、女は家事をする」って言うだろう？ 女性 でも私は働いているわ。 男性 僕のお金は働いていても、家事は全部やっていたよ。 女性 それは…わかった。じゃあ私が作るわ。 男性の気持ち (「え？きみが作ってくれないの？」のとき)			
( )			
女性の気持ち (「それは…わかった。じゃあ私が作るわ。」のとき)			
( )			
2. 下の会話は、ある親子のやりとりです。2人になったつもりで読みましょう。また、「」に私の言葉を考え会話を完成させ、( )に私の気持ちを考えて書きましょう。 母 あなたは大きくなったら何になりたいの？ 私 そうだなあ、お医者さんか保育士さんになりたい！ 母 そう。じゃあ、あなたは女の子だから保育士さんになつたらいいわ。 私 どうして？ 母 女の子は家の仕事もやらなくちゃいけないから、お医者さんは忙しくて大変よ。それに、お医者さんは男の人の仕事よ。 私 「」			
私の気持ち ( )			

2) 夫婦の会話から家事を考える場面 (児童の活動2)

ワークシートの問1のある夫婦の会話を読み、下線部の男女それぞれの気持ちを考えさせた。

男性の「え? きみが作ってくれないの?」という発言の時の男性の気持ちについて、ほとんどの児童が「作ってくれないの?」「僕が作るんじゃないだろう?」「家事は女性の仕事だろ」と答えていた。これは、男性が「女性が家事をするのが当たり前」という認識を持っていることを理解しているためと考えられた。他には、2名が「俺の方が(稼ぐ)金額が高い 男」「女性より多く働いている 女」と答えていた。ワークシートの設定として、【男性も女性も働いていて…】としか書かれていないのに、男性の方が賃金が高く、労働時間や内容が多いと考えられていることがわかる。

女性の「それは…わかった。じゃあ私が作るわ。」という発言の時の女性の気持ちについての児童の反応は、女性ばかりが料理を作ることに對して疑問を抱きながらしぶしぶ作るようになったという内容であった。一部の児童

表3 授業資料

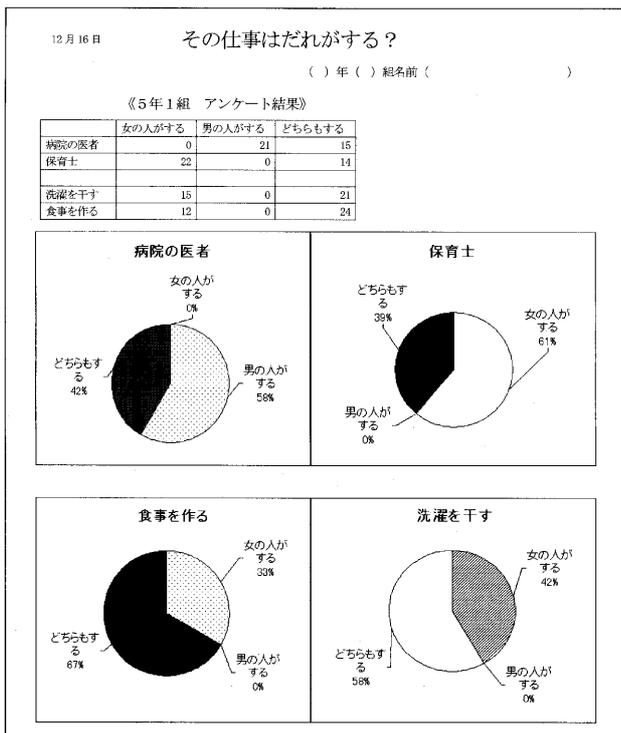


表4 板書

12/16 その仕事はだれがする?

**めあて: 仕事について考えよう**

男性の気持ち  
 ・作ってほしいのに  
 ・女性が家事をするのは当たり前  
 ・何でも作らなければいけないの  
 ・ぼくが作らなすいいつも作らない

女性の気持ち  
 ・たまには作ってよ  
 ・男も女も一緒に作るの、どうして作らないの  
 ・どうして作らなすいいつも作らないの

私のセリフ  
 ・「そういうのは関係ない」  
 ・男も女も関係ない  
 ・じゃあ保育士さんに  
 ・ほんとうはお医者さんになりた  
 私の気持ち  
 ・「女」「男」は関係ない  
 ・どうして男女で区別するの  
 だろう

【日本の成人男女の家事分担希望 1990】  
 グラフ

【世界の夫妻の家事と仕事の分担】  
 グラフ

バスの運転手の女性  
 保育士の男性の写真

ベビーカーを押す男性の写真(ノルウェー)  
 主婦と主夫

まとめ  
 個性や能力を生かすために、職業や家事において性別にとらわれないことが大切だ

児童は反論せずに、設定を受け入れる答え方を示していた。男性の発言に比べ児童の言葉で書かれた多くのバリエーションが見られたが、次のように5つに分類できた。

① しかたないとあきらめる型 (8名)

「嫌だけど作る 男」「作れないならいけばいいのに 男」「男性のお母さんは優しくったんだ 女」「男性のお母さんも作ってたんだ 男」と思いながら、しかたなく作るようになったという答えであった。

この型の児童のうちの一人の男子は、男性の気持ちでは「やばい、僕が作ったらまずい」と答えており、男性は料理が普段作らないから苦手であると考えている。女子児童の一人は、男性の母親が家事をしていたからと答えており、周囲の環境に影響を受けていることがわかる。また、男性の気持ちの中で、「俺の方が(稼ぐ)金額が高い」と答えた男子児童の答えは「しょうがない、私はお金をもらっているような立場だし」という答えであった。労働賃金が低いことが家庭の家事分担に影響していると考えられる。

② どうして?と疑問を持つ型 (4名)

「決まっていない… 女」「なぜ女性が家事をやるのだろう。男性もやってくれれば楽なのに(法律もないのに) 女」「男が家事をしようが女が家事をしようがいいのに」と男性の態度に違和感を感じている。

疑問を言葉に表しているのはすべて女子児童であった。将来自分たちがそういう立場にたつことが想像できたのか、同姓なので考えやすかったのであろうか。

③ たまには作ってほしい型 (13名)

「男性も手伝ってほしい 男」「そんなにいうなら作ってあげよう 男」「いつも私がやっているから 女」「一度くらい作ってもいいじゃないか 女」といつも作っているから、たまには作ってくれてもいいじゃないかというような反応であった。男性に対して不満を抱いている。しかし、問題の設定が家事の主体が女性であることも影響しているのか、「すべて平等にする」というよりも、「家事のできる部分を手伝ってほしい」と考えている。

④ 納得する型 (2名)

「それもそうね 男」「私も疲れているけれど、夫のためだ。 男」と女性が作ることに違和感を感じず、納得している答えであった。人数は少ないが、女性が家事をすることが普通になっていることがわかる。

⑤ その他

「疲れているのに 女」「自分の分だけ作りたいよ 女」と設定での女性の疲労感を実感している児童もみられた。

今回の授業では隣同士の男女でペアをつくり、活動させた。「二人はラブラブカップルです。」と強調しすぎたためか、二人で声をだして読もうとせず、一人で黙読して答えを書いている児童がいた。また、前に出て発表する場面でも、恥ずかしがり、嫌だという児童がいた。し

かし、積極的に発表しようとする児童もいた。今回は前  
に出て発表したいという児童で新たにペアを作り発表さ  
せた。活動に抵抗感を持つ児童は取りかかりが遅く、ク  
ラス全体的として、活動が少し長引いたため、学習指導  
案で扱うことを予定していた主夫の存在については終結  
でふれることとした。ペアを異性としたために、小学校  
5年という発達段階にある児童の中に抵抗があった可能  
性がある。同性同士で活動をする、一方が必ず違う性  
の役を担うことになるので、新鮮であったかもしれない。

発表の後、「日本の成人男女の家事分担希望 1993」と  
「世界の夫妻の家事と仕事の分担 2001」の資料を活用  
して他国と比較し、日本男性の家事分担の割合が小さい  
現状を取り上げた場面で多くの児童が強い関心を示した。  
3) 親子のロールプレイング (児童の活動3)

ワークシートの問2のある親子の会話を読み、それに  
続く「私のセリフ」及び気持ちを考えさせた。

#### <私のセリフ>

母の「女の子は家の仕事もやらずにちゃいけないから、  
お医者さんは忙しくて大変よ。それに、お医者さんは男  
の人の仕事よ」というセリフに続く「私のセリフ」は、  
ほとんどの児童が母のセリフに対して反論する答えで  
あった。問1に比べて自分たちのこととして捉えやす  
かったのか、それぞれ自分のオリジナルな言葉で答えて  
いた。しかし、4名の児童は母の言うことに従い、親に  
はさからえないと思っていることがうかがえる。児童の  
答えた「私のセリフ」は3種に分類できた。

##### ① 母に従う型 (4名)

「そうなんだー、じゃあ保育士さんにするわ 男」「ふー  
ん 女」「え、でも…うん。じゃあ保育士さんにする  
女」「じゃあ保育士さんにする 女」しかし、セリフでは  
母の意見に同意していたが、気持ちでは、3名がおかし  
いと思っている答えであった。

##### ② 母に反論する (その他の児童)

反論の仕方は2型に分かれる。

##### ②-A 職業選択は自分でしたい型 (4名)

「なんで決められなだめなのかなあ。男」「べつにそん  
なこと夢をあきらめたくないよ。男」「そんなこと決  
まってるじゃない。男」とどうして母に自分の将来を  
決められなくてはいけないのか、と反論している。性別  
に目を向けるよりも「やりたいことは自分で決めたい」  
という意識の方が大きいことが分かる。

##### ②-B 性別に関係なく職業選択したい型 (22名)

「え、でも女の子がお医者さんしてもいいでしょ。男の  
人の仕事女の人の仕事なんて関係ないんじゃない。女」  
「女の子が医者をやったらいけないの? 男」「そういう  
のは男女差別。男」「そうかなあ、男の人の仕事とは思  
わないけどなあ。女」などの答えがあった。しかし、気  
持ちでは女も男の関係ないと思っている、セリフにす

ると、性別に関係ない言葉になっている児童が多かった。  
また、セリフに性別について反論する言葉を書いている  
のは女子児童が多かった。

#### <セリフの背景にある気持ち>

母の「女の子は家の仕事もやらずにちゃいけないから、  
お医者さんは忙しくて大変よ。それに、お医者さんは男  
の人の仕事よ。」というセリフに続く「私のセリフ」の時  
の気持ちは「私のセリフ」で見たように、ほとんどの児  
童が性別で職業を分けるのはおかしい、女性でも医者には  
なれるという反応であった。「私のセリフ」と同じく、  
児童の反応は3タイプに分かれる。

##### ① 職業選択は自分でしたい型 (4名)

「自分で決めさせてくれたらなあ。男」「やりたいこと  
をやってもいいだろ。男」「なんでそう決めるの、自分  
のやりたい仕事をしたい。男」そのタイプの児童は、問  
2では性別に関する内容は出てこなかった。

##### ② 性別に関係なく職業選択したい型 (22名)

「医者には男も女もいると思うんだらう… 女」「どう  
して男女が関係あるのだから。男」「なんで医者は男の  
仕事なんだらう。べつに女の子がやってもいいんじゃない  
か。男」「男の人しかやってはいけない仕事なんかない  
…くっ…新しい法律を作ろう。お母さん一緒にやろう 男」  
「別に男の人が家の仕事をやってくれたらいいのに。男」  
「なんで男と女に仕事に分かれているんだらう。別に分け  
なくてもいいのに。女」などがあつた。意識としては、  
男女に差は見られなかった。「私」が自分たちと  
同年代であるし、将来につながる内容であった。ので、  
問1よりも具体的に書くことができているようであった。  
また、文章に出てくる「医者」という職業に限定せずに  
職業全体をみて男女で分けるのはおかしいと考えること  
ができている児童が多かった。

##### ③ 母の言い分に納得する型 (1名)

「なっとく納得という気持ち 男」この児童は問1でも、  
女性の気持ちに違和感を持っていないようであった。

児童の活動3は、児童の活動2より児童は積極的に取  
り組んでいた。実際に自分の家庭を考えて「ぼくの家庭  
はそんなこと言えへん。」と机間指導につぶやく児童も  
いた。児童たちの家庭では家事を女性が担っている実態  
が多いようであるが、将来の職業については性別にとら  
われていないようであった。この活動では2グループが  
発表した。

活動後に女性のバスの運転手と男性の保育士の写真を  
紹介した場面では児童が注目していた。また、女性のバ  
スの運転手に会ったことがあると言った児童がいた。

##### 4) 終結 (児童の活動4)

ここでは、これまでの授業の中で取り上げることができ  
なかつた事前調査結果と主夫について説明をした。授

業が長引いて全体で2分ほど授業時間が延長した。

## 2. 児童の授業後のジェンダー意識の変化

### (1) 家事労働に関する意識

いくつかの家事労働について「だれがすると思いますか」という問いに対し、「女の人がする」「男の人がする」「男の人と女の人のもどちらもある」の選択肢の中から「女の人がする」と答えた児童が多かった。しかし、事後調査では「どちらもする」と答えた児童の人数が全ての選択肢において増えた。このことから、児童から「家庭の仕事は女性が行う」という認識がなくなり、「男性・女性のどちらもが行うべきである」という認識を持つようになったと考えられる。しかし、図1にみられるように36名の学級の中で、一方の性別が行うほうが良いと考えている児童もいる。特に、「日曜大工をする」では事後調査でも「男の人と女の人のもどちらもある」は7名と1/5に止まっている。その他の児童は「男の人がする」と答えている。筋力を使う内容や危険な内容の仕事は危険であるために男性が行なうという意識が強いようである。また、「日曜大工をする」以外の仕事では「男の人がする」と答えた児童はいなかった。児童のまわりやメディアで家事を女性が担っている実態とイメージが強いからであろう。

今回の授業では、ノルウェーの男性の育児の写真の紹介や他国と日本の男女の家事分担の比較を行うことを通して性別に関係なくお互いが協力して家事分担を行うことの大切さを理解させようとした結果、家事労働に関して多くの児童の家事労働に関するジェンダー意識の改善がみられた。しかし、全員の意識を変化させることはできなかったため、今後も継続的な指導が必要である。

### (2) 職業労働に関する意識

いくつかの職業労働に対して「大人になったらだれがすると思いますか」という問いに対し、「女の人がする」

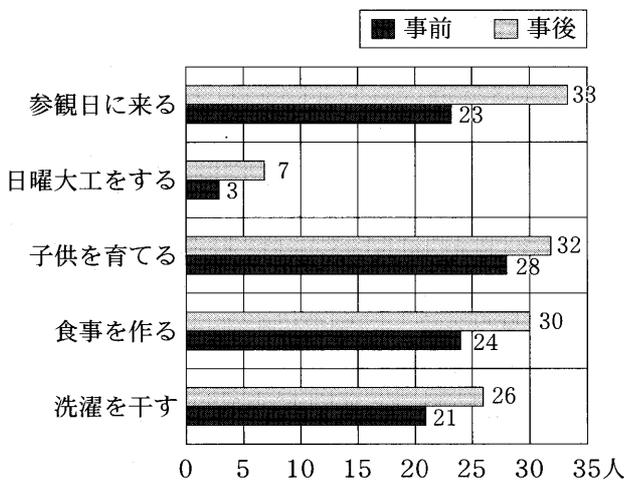


図1 児童のとらえる「男の人・女の人のもどちらもある」家事労働

「男の人がする」「男の人・女の人のもどちらもある」の選択肢の中から「男の人・女の人のもどちらもある」と答えた児童の人数を示したものが図2である。家事労働と同様に、事前調査に比べて事後調査では「男の人・女の人のもどちらもある」と答えた児童の人数が項目に設定した全ての職業労働において増えた。特に、「家で家事をする人」「トラック・ダンプの運転手」「体育の先生」「家庭科の先生」「保育士」「病院の看護師」「病院の医者」については事前調査の2倍の児童が「どちらもする」と答えている。授業のロールプレイングで自分が将来つきたい職業について考える活動を行ったことにより、性別にとられない職業選択が大切であると理解したためであると考えられる。また、女性のバスの運転手や男性の保育士の写真を見せ存在を紹介したことで、これまで知らなかった知識を得て、児童が職業選択に性別は関係ないと感じたためであると考えられる。この結果から、児童の職業に関するジェンダー意識が改善されたといえる。しかし、まだ、「大工さん」などの職業は、一方の性の仕事ととらえる傾向が残っている。児童が性別にとられないことなく個性を十分に発揮できる職業を考えられるようにするためには、一方の性だけが担うと考えられがちな職業については、具体的に取り上げるとジェンダー意識の払拭に効果的であると思われる。

児童の考え方は柔軟に変化するため、誤った情報を伝えれば逆の方向に進んでしまう可能性も大きい。ジェンダー意識は払拭すべき問題であるという認識を持つように指導することが重要である。

また、「女の人にしかできない、男の人にしかできない仕事があると思いますか」について「ない」と答えた児

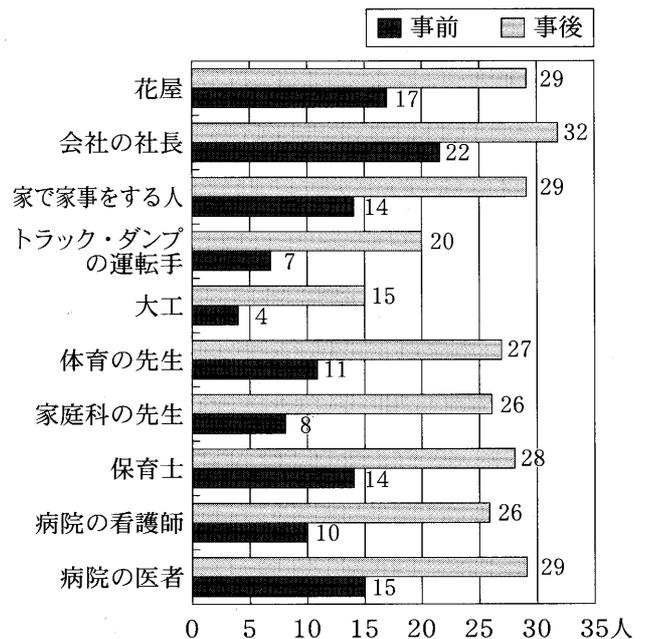


図2 児童のとらえる「男の人・女の人のもどちらもある」職業労働

童は事前調査よりも人数は増えているが、学級の1/3の児童は「ある」と答えている。「女の人にしかできない仕事」について「客室乗務員」と答えた児童は「女性しか見たことがないから・女の人の仕事だから」という理由で2名いた。「保育士と家の仕事」をする人と答えた女子児童は、「第一、男の人が保育をしていたら変だし、家の仕事は女の人で十分」と理由を書いていた。また、「男の人にしかできない仕事」では、「女の人は力がないし、危ないから」という理由で「消防隊員」をあげていた。今回の授業でジェンダー意識が薄れた児童もいたが、全く変わっていない児童もいたことがわかる。ジェンダー意識は日常生活の中で身につく。この根強く残るジェンダー意識を払拭するためには、学校教育だけでなく家庭や社会生活の中での対応も必要であり、今後の重要な課題といえる。

### 3 将来の職業労働・家事労働に関する児童の意識

図3は児童の将来つきたい職業を選択した理由の複数回答である。児童は「家の人の職業」や「自分の習い事に関する職業」など、現在の生活に密接する職業が多いことが分かる。確かに、親の職業などは身近で知る機会が多い職業であろう。しかし、その限られた中で職業を選択しようとする、自分の個性を十分に生かせる職業が見つかるとは限らない。身近な職業だけでなく、自分にあった職業を探そうという意欲が必要であると考え。今回の授業で世界には数多くの職業があることを紹介したことで職業を考える視野が広がったことは、事後の調査結果の図4からうかがえる。小学校におけるキャリア教育の最初の授業の導入として効果的であるといえる。

授業実践後に、『「男は外で働き、女は家で家事をする」のが当たり前だという考え方についてどうなればよいと思いますか』と尋ねた結果が図5である。「なくなればよい」と答えた児童が14名、「このままがいい」と答えた

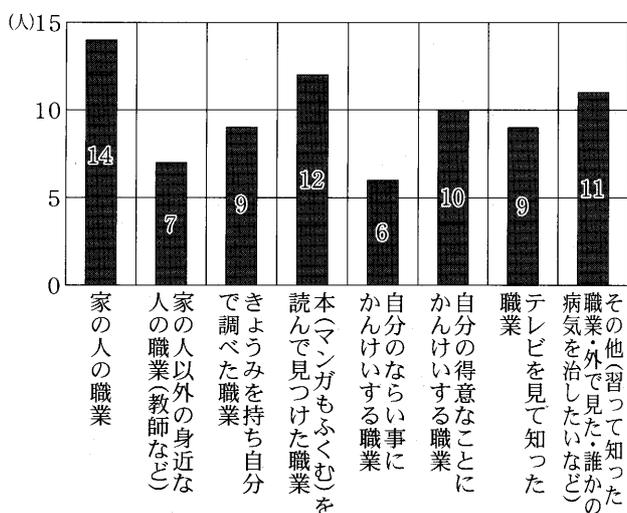


図3 将来やりたい職業をみつけた理由

児童が3名、「どちらでもよい」と答えた児童は18名であった。現状を維持したいと考えている児童は少ないものの、「どちらでもよい」と答える児童が学級の半数を占めており、現状を変えようとする意識は身につけていないといえる。しかし、「なくなればよい」と答えた児童の中には、「そういう(男は外で働き、女は家で家事をするのが当たり前だと思っている)考えの人に、『なぜそう考えるのか?』とか『そういう考え方はちがうんじゃないか?』などと自分の考えを発言する」、「男女関係なく仕事をする」、「男の人がもっと家事を手伝えればいい」、「授業の時に見せていただいた、国は忘れたけど、男の人が赤ちゃんの世話をしていることなどから日本でもそういうことが増えていけばいいと思う」という積極的な姿勢がみられた。のためには、今後、さらに、ジェンダー意識の払拭と男女共同参画社会の実現への積極的な意欲を育成するための授業の積み上げが必要である。

### IV. おわりに

授業実践によって社会生活の中の職業労働と家庭生活の家事労働の双方に関して多くの児童のジェンダー意識に改善が見られたといえ、ジェンダー意識は生活に根強く存在しており、継続的な指導とともに家庭や地域への働きかけが今後不可欠である。ジェンダーにとらわれずに個性や能力を発揮できる男女共同参画社会をめざして、家庭科のキャリア教育の授業をさらに探求していくことが課題である。

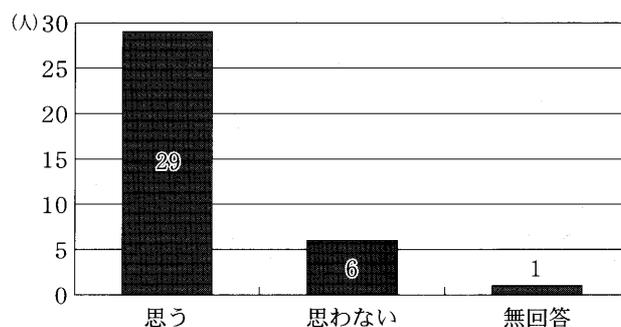


図4 「これから職業を考える時に知らない職業を調べようと思いますか」の問いに対する児童の回答

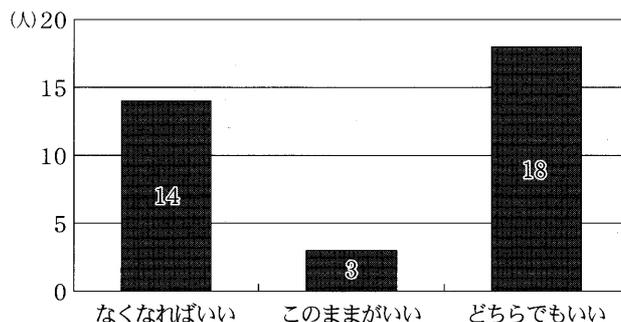


図5 「『男は外で働き、女は家で家事をする』考えに対する児童の回答

## 注

- 1) 文部科学省ホームページ「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観，職業観を育てるために～」  
<http://search.jword.jp/cns.dll?type=sb&fm=4&agent=&partner=AP&lang=euc&name=%CA%B8%C9%F4%B2%CA%B3%D8%BE%CA&bypass=2&selsecategory=&service=jwd&style=1>
- 2) 三村隆男 (2004), 『キャリア教育入門 その理論と実践のために』, 実業之日本社, 巻頭資料 p.6
- 3) 河崎智恵 (2004), キャリア教育の視点から見た家庭科の可能性, 福田公子ほか編 『生活実践と結ぶ家庭科教育の発展』, 大学教育出版, p114
- 4) 文部省 (1999), 『小学校学習指導要領解説 家庭編』, 開隆堂, p.3

2005年9月8日受理